

棕櫚の主日礼拝 2024年3月24日(日)

題 『イエスの十字架わがためなり』

テキスト：ヨハネによる福音書19章16～27節

今日は教会歴では棕櫚の主日です。神の都と呼ばれたエルサレムの町に住む大勢の人たちが棕櫚の葉を道にしいてエルサレムの町に入る主イエスを迎えたのです。この町で神の子イエスは十字架につけられました。皆さま、受付にこの受難週・一週間にちなんだ「聖書個所のちらし」がありますので、家でお読みくださればと思います。

今日の聖書の個所は、イエスが十字架につけられる場面です。共にみことばを学びましょう。

16:そこで、ピラトは、十字架につけるために、イエスを彼らに引き渡した。このピラトは、イエス時代今から約2000年前、ユダヤの国を支配していたローマ帝国の皇帝カイザーからユダヤ地方の治安を維持する責任を負わされて派遣された総督です。毎週礼拝で告白する使徒信条にも、主イエスに関して、「ポンテオ・ピラトのもとで苦しみを受け、十字架につけられて」とあります。

イエスが十字架につけられる場面は、ヨハネによる福音書だけではなく、マルコによる福音書、マタイによる福音書、ルカによる福音書にも記されています。それほど重要な場面です。

「こうして、彼らはイエスを引き取った。」と聖書では淡々と記されています。

17:イエスは、自ら十字架を背負い、いわゆる「されこうべの場所」、

すなわちヘブライ語でゴルゴタという所へ向かわれた。

イエスは、自らがつけられる十字架の木を、これは十字架の横木であったと言われます。自分で背負って、「されこうべの場所」、地形が人間の頭蓋骨に似ていたのでそう呼ばれていたようです。そこに向かわれたのです。十字架の縦の木は処刑の場所にすでに立てられていたのです。十字架を背負うということは、罪を背負うということ、イエスは罪は犯していませんので、イエスを十字架につけようとするローマの権力者、ユダヤ教の大祭司を中心とする指導者たちをはじめ、イエスの処刑をみていた人々の罪、またイエスを離れて行った弟子たちの罪、そしてわたしもそこにいたらきっと離れたと思います。その意味で私の、わたしたち人間の罪を背負って死んで行かれたのだと思えるのです

そして十字架刑というのは、当時のローマ帝国が帝国に反抗する政治犯に対して行う処刑方法であったことが今日明らかになっています。また十字架刑は

死刑の方法としては、一番残虐だと言われています。

18 節に、

18:そこで、彼らはイエスを十字架につけた。また、イエスと一緒にほかの二人をも、イエスを真ん中にして両側に、十字架につけた。この二人の内の一人は、ルカによる福音書によれば、イエスをののしります。もう一人はイエスに赦しを求めています。ルカ 23 章 39 節～43 節 (p158) 以下にあるように、「39:十字架にかけられていた犯罪人の一人が、イエスをののしった。お前はメシアではないか。自分自身と我々を救ってみろ。」それに対してもう一人の人は「お前は神をも恐れないのか、同じ刑罰をうけているのに、我々は、自分のやったことの報いを受けているのだから、当然だ。しかし、この方は何も悪いことをしていない。」そして「イエスよ、あなたの御国においでになるときには、わたしを思い出してください。」と言った。するとイエスは、「はっきり言っておくが、あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる」と言われた。楽園とは、パラダイスと言われる天国のことです。十字架の上でこのようなことがあったことを聖書は伝えています。

ちなみに余談ですが、洲本教会の礼拝堂の正面上に十字架がありますが、夜礼拝堂の電気を全部消して、十字架にスポットライトを向けると、右と左に十字架の陰が見えます。3本の十字架に見えます。その時、わたしはこの十字架の場面を思うのです。イエスの十字架は、わたしの罪を背負っていることにもなるのだと、「イエスの十字架わがためなり」だと。「主イエスよ、わたしの罪をお赦してください。」と。罪の赦しは、自分頑張りや力できることではなく神さまの憐みによって自らの心の中に起こるのだと思います。その時からその人は確かに変えられて行くのです。宗教改革者のマルティン・ルターは「キリスト者は罪赦された罪人」だと言ったと言われています。イエスの十字架は、キリスト教信仰の土台です。

さて、ローマ総督のピラトは、

19:ピラトは罪状書きを書いて、十字架の上に掛けた。それには、「**ナザレのイエス、ユダヤ人の王**」と書いてあった。

20:イエスが十字架につけられた場所は都に近かったので、多くのユダヤ人がその罪状書きを読んだ。それは、ヘブライ語、ラテン語、ギリシア語で書かれていた。

「ヘブライ語、ラテン語、ギリシア語」とは、当時のローマ帝国内の世界を支配していた言語であったと言って良いでしょう。ちなみに、今はどうなのかわかりませんが私が若い頃には、ドイツでは大学に備える高校では英語はもと

より、ラテン語とギリシャ語の学びは必修とのことでした。

イエスの罪状書きは、「ナザレのイエス、ユダヤ人の王」でした。ローマ総督のピラトがユダヤの中心地であるエルサレムでイエスに対してこのような言葉をつけるのも不思議だと思います。ピラトは本心ではイエスを十字架につける必要はないとも考えていたとも言われます。ただ彼は、ユダヤを治めなければ、自分の首がローマ皇帝によって飛ぶことを知っていました。ですから、ユダヤ国内の治安を維持するために、ユダヤ人権力者たちのイエスを死刑にせよ、との声に従ったのだと言われています。

ピラトに対して、

21:ユダヤ人の祭司長たちがピラトに、『ユダヤ人の王』と書かず、『この男は「ユダヤ人の王」と自称した』と書いてください』と言った、と記されています。

ユダヤの祭司長たちは、イエスを「ユダヤ人の王」とするのは、受け入れなかったのです。

しかし、皮肉にも彼らはイエスの代わりに、彼らが一番嫌がっていたローマ皇帝を自分たちの王としたのです。

しかし、せめてものピラトの意地でしょうか、または、ピラトのずる賢さかもしれないとも思えるのですが、ユダヤの権力者がこぞってローマ皇帝を自分たちの王と認めることは、ユダヤの総督ピラトの手柄ともなるということなのです。

22:ピラトは、「わたしが書いたものは、書いたままにしておけ」と厳しく言ったのです。このことばは原語では「わたしが書いたものは、わたしが書いたものだ。」となっています。つまり、「ナザレのイエス、ユダヤ人の王」誰もこのことばを変えるな、そのままにしておけとの命令です。この世では、悪は悪でつながり、善は善でつながるのかもしれませんが。

聖書には、その後イエスの服を分け合った兵士たちの姿を伝えた後、25節に心に残ることが記されています。

「25:イエスの十字架のそばには、その母と母の姉妹、クロパの妻マリアとマグダラのマリアとが立っていた。」と伝えています。母マリアはどのような思いで、わが子の死の場面に立ち会ったのでしょうか。またイエスに多くの悪い病気を癒してもらい、イエスを思い続けたマグダラのマリアの姿もありました。

26:イエスは、母とそのそばにいる愛する弟子とを見て、母に、「婦人よ、御覧なさい。あなたの子です」と言われた。

27:それから弟子に言われた。「見なさい。あなたの母です。」そのと

きから、この弟子はイエスの母を自分の家に引き取った、と。

このイエスの愛された弟子ヨハネは後に今日のトルコにある古代の町エフェ

ソでの伝道に励んだと言われ、

イエスの母マリアと共に過ごしたとされる小さな「憩いの家」も残されています。今でも世界からの訪問者も絶えないようです。わたしも20年程前、教会の人たちと訪問する機会がありましたが、この「憩いの家」の建物の内部に入ると、何とも言えない心のやすらぎ、あたたかいものを感じました。

そしてこの後、「イエスの十字架わがためなり」との信仰の告白が世界に広がって行き、時を経てここ日本、淡路島にも伝えられ、わたしたちも今その信仰に生かされていることを、共にイエス・キリストと神さまに感謝します。生涯をかけて十字架のイエスそして復活された勝利者イエスを伝えてくださった召された牧師たち、宣教師たち、信徒の人たちに感謝したいと思わされます。わたしたちも「イエスの十字架わがためなり」と賛美し伝える群れでありたいと願います。

皆さまの上に主の平安をお祈りいたします。